

千葉鋸山の旅 2019

旅のチカラ研究所

2019年6月

旅のチカラ研究所 植木圭二

ウォーキング・イベントに参加し、千葉県の鋸山（のこぎりやま）に行ってきた。日帰りの旅を旅行記にしたためののは初めてだが、そうさせた理由は房総半島南部のこの山が興味深くおすすめ場所なのと、以前から持ち越しになっていた宿題の答えが見出せたからだ。

■旅はハプニング

私は今、房総半島南部の鋸山近くの JR 浜金谷駅を目指して電車に乗っている。

本日は昔勤めていた会社の OB 会の「歩こう会」があるので、私はこれに参加すべく朝早く出発の準備をしていると突然携帯電話が鳴り出した。電話をとると「植木さん、強風でフェリーが欠航しているので電車で来て下さい」と幹事が興奮気味にしゃべっている。私も慌ててインターネットで運行状況を確認すると、本日再開の見通しは立っていないとまで書かれている。

元々は房総半島の対岸の久里浜から東京湾フェリーに乗って金谷に渡るという予定が組まれていたが、そのフェリーが欠航なので金谷を目指して東京湾をぐるりと回る電車に幹事を含め私たち参加者数名が乗っている。



さらに悪いことが続く。鋸山に登る唯一の公共交通機関のロープウェイも運休していることが判明し、幹事は慌ててスマホをたたくて善後策を調べ始める。この事態は全く予想していなかったというのが正直なところだろう。

ただ私自身は逆にワクワクしている自分に気が付く。旅にはハプニングが付きものであるが、それによって旅がより一層感動的になることはよくある。最近の私の旅ではその傾向が強い。

■ 鋸山を登る

いくつかある登山ルートには車で登れるルートもあるが、路線バスは通っておらず、ロープウェイが使えないということは結局歩いて登る選択肢しかないことが分かる。いろいろ調べていた幹事もこれで悩みが吹っ切れたようで、心なしか晴れ晴れとした顔になっている。

登山ルートは結局歩いて登るのだから同じことだろうと、手っ取り早い最も近いルートを選ぶ。実はこのルートが最も急だということに後で気が付くことになる。

鋸山の標高は 329m と低いが、急峻な山なので登るのはきつい。しかも海辺からの登山なのでほぼその高さを登らないといけない。

一般的に登山口は少し標高の高いところにある。例えば富士山は 5 合目から登山を始めるのが、その 5 合目というのは 3776m の半分ではなく登山口から頂上までの半分となっている。富士宮ルートの登山口は標高 1000m 付近にあるので 5 合目の標高は約 2400m もあり、そこから登るということは残り 1376m しかない。

そう考えると鋸山の登山は富士登山の 1/4 で、空気は薄くないが富士山よりも急峻なルートを私たちロートル軍団が急きょ挑戦することになる。

話はそれるが、千葉県は 47 都道府県で最も最高峰の山が低い県で、その最高峰は愛宕山の 408m で鋸山とそう変わらない。それは沖縄県よりも低く、山が険しい日本列島にあってこんな地域は珍しい。そういう千葉県の特性を森田健作知事知っているのだろうか。

さてその低い山しかない千葉県において鋸山はというと、その名が示すようにノコギリのような異様な姿をしている。



良質な房州石が取れたことで江戸時代には日本でも有数の石切り場だった。

そのため急峻な登山道には大きな石があり、それらにノミを入れてくり抜いて階段にしている。当初は直角の階段だったのだろうが、房州石は加工し易く柔らかいので今の階段は丸みを帯びている。この山が昔から信仰の山で多くの人々がこの階段を利用したことと、切り出した石の運搬でそうなったのだろう。

階段を登るといのは足に負担がかかるもので、山歩きの覚悟をしていないロートル軍団には思いのほかきつい。それでも休み休み、声を掛け合いながら、冗談を言いながら登る。

脱落しそうな人がいれば、後ろから押してくれる人も現れ、荷物で手がふさがっている人がいれば、その荷物を自分のリュックに入れてやるなどコンビネーションやコミュニケーションは抜群だ。さすがにこのロートル軍団はただ者ではない。

これが同じ会社で苦楽を共にした仲間というものなのだろうか。私は素晴らしい会社に入社して定年までいられたことに感謝しつつ、心地よい汗をかきながら登り続ける。

快晴に近い上空からは6月の強い日差しが降り注ぐが、登山道は岩や木々に覆われているので比較的涼しい。日差しはそれらの木々が適度に遮ってくれて私たちは心地よい木漏れ日を浴びて歩いている。

またその木々の間を時おり風が吹き抜けるが、実に爽やかに感じられる。フェリーを欠航に追い込んだ強風もこの信仰の山の木々によって弱まり、かえって気持ちよい。



その木々が途絶えた場所で後ろを振り向くと、眼下には金谷の街と青い海が見える。海は強風のために白波が立っており、その強風がゆえに船は全く航行していない。

これが東京湾の入口で多くの船が行き交う浦賀水道かと我が目を疑うような光景だ。ロートル軍団の面々からも「船が一隻も無いなんて、こんな浦賀水道は初めて見た」という声が聞こえてくる。

その浦賀水道を挟んだ対岸には、神奈川県の大磯半島が見える。目と鼻の先にあるというのはこういうことだろう。

誰かが「あそこから渡って来れば、簡単に着いたのになあ」とポツリと言う。



■石切り場

約 1 時間、ロートル軍団は助け合いながら頑張っようやく頂上付近にやって来る。頂上付近一帯は日本寺という寺の境内で、石切り場跡や展望台など全ての施設が入ったかなり広い地域になっている。その境内に入るためにいくつかある登山ルート毎に拝観料徴収所が置かれている。

石切り場跡は、石を切り出した跡が垂直のそそり立つ壁になっており、その高さは 30m いや 50m くらいありそうだ。すると、どうやってこの石を掘ったのかだろうかという疑問の声がメンバーから聞こえてくる。

若い女の子やおばさんたちならば、この絶壁の凄さに素直に感激するだけだが、作られ方に関心を示すあたりはこのロートル軍団のこだわりなのだろう。そのように物事を探求する姿勢は、かつて仕事を進めてきた中で自然に身にしみついたものなのだろう。

早速、誰かが石の切り出しについて講釈を始める。

石はまず、上から切り出されたのに違いない。というのも上からでないと割り当てられた区画が分からないのと、下からでは崩落の危険が常にあるからだ。そして切り出した石は登ってきた登山ルートや板などでスロープを作って降ろしていったのだろう。

そしてある程度降ろした後は車力で運ばれたので、今でも車力道というのがあり鋸山登山ルートの一つになっている。

「地獄のぞき」という絶壁から突き出た岩がある。鋸山の紹介には必ずこの写真が使われるという名物スポットで下までの高さは 100m 以上もある。突端まで行けるように柵が設けてあり、観光客たちは恐る恐る突端に行って遥か眼下の地獄を覗いている。

私は直感的に、この岩は自然に出来たのではないだろうと思った。いくつか資料を調べてもその起源は良く分からなかったが、恐らくは石切り工たちが遊び心でこの形に残したのだろう。



■日本寺、そして大仏

頂上の展望台まで来ると麓から歩いて登ってくる登山客以外に、旗をもった添乗員に先導された団体ツアー客も多く見かける。その中には息が上がっている人も多い。恐らくは観光バスで頂上手前の駐車場まで来て、その後の短い距離でも鋸山は急峻なので階段がこたえたのだろう。

残念ながら、彼らは木漏れ日や心地よい風のご褒美はもらっていない。

この日本寺は、開山が奈良時代の 725 年という関東で最も古い寺だという。その名前が示すように七堂十二院百坊を完備したという国内有数の規模で、良弁、空海、慈覚といった有名僧侶もここで修行したという。

私が旅行記「東関東の旅 2019」で書いたように関東地方は房総半島の南端から人が多く住み始めて反映してきたことを裏付けている。

ちょっと平らな広場に大きな石造りの大仏が座している。高さは 31m もあり奈良の大仏が 15m ということなのでその大きさは圧巻のはずだが、私には奈良の大仏の方が迫力や存在感を強く感じる。それは恐らく奈良の大仏は大仏殿の中であって、暗い闇の中に座しているからだだろう。こちらの大仏はオープンエアで開放的なためだろうか、何となく優しさを感じる。

贈答品もそうだが、入れ物が重要だ。大仏までも建屋に入れると相手に与える印象が全く異なるということを知る。



この大仏は大きな石の山を大仏の形に彫ったもので、奈良や鎌倉の大仏のように鑄造して作ったものではない。江戸時代の 1783 年に完成したこの大仏は、大野甚五郎英令という名工が弟子 27 人と 3 年かけて彫ったと立て看板に記されている。

この大仏の彫り方もまたロートル軍団の話題になる。設計図はどうしたのか、岩にその設計図を貼り付けて彫ったのか、探究心は旺盛だ。

昔ならば子供電話相談室に電話してもらおうようだが、今はそんな番組はないのでチョコちゃんに手紙を書いてもらうしかない。

そしてその疑問に今度は私が答え始める。

まずはモデルになる小さな仏像を作ったのだろう。小さいといっても恐らくは人間と同じくらいか、もっと大きさのもので、それは石である必要はなく木でも何でもよい。そのモデルを見ながらリーダーが指揮して石を彫っていったに違いないと。

この説明に一同納得したようだ。

鋸山、日本寺は他にも見どころ満載だ。石に刻んだ百尺観音はその名のとおり百尺（約 30m）あり、千五百羅漢という圧倒的な数の観音像、仁王門や観音堂などの歴史的建造物、そして良弁、空海、慈覚といった有名僧侶が残したものなどたくさんある。

私たちは登って来た道ではなく、反対側の表参道から下山するが、こんなに登り易い道があったのかと話しつつ、鋸山を後にする。

「さあ、あとは打ち上げだ」と幹事が発するとロートル軍団は生気を取り戻す。みんなの顔には安堵感、達成感、そして打ち上げへの期待感が満ち溢れている。

■旅の記録

実施は2019年6月16日（日）、交通費は約4500円だった。その他の飲食費用等と合わせても1万円はかかっている。

横浜からの経路と費用を記す。往路はJR線（横浜～浜金谷）2268円、復路はJR線（保田～木更津）669円、高速バスが（木更津～アクアライン経由～横浜）1550円になった。

その他には、日本寺の拝観料600円、木更津での打ち上げ費用3000円、昼食のおにぎりや飲み物が約500円だった。

■宿題

旅行記「奈良飛鳥の旅2019」の中で、宿題になっていたことがある。鋸山を訪れてその答えが見えてきた。

その宿題とは、日本では山の言い方が「やま」と「さん」の2通りある。例えば天香久山「あまのかぐやま」と富士山「ふじさん」だ。問題はその使い分けで、「〇〇さん」というのは信仰の山で、「〇〇やま」というのは信仰のない普通の山だと、奈良飛鳥の旅と一緒にいったスーパー歴女がどこかで聞いてきた。

私を含め他のメンバーはその説に半分納得するも何となく腑に落ちないので、いろいろな反論を試みたが、どれも今ひとつ的を射ていなかった。それが宿題になっていた。

鋸山は信仰の山なのに「のこぎりやま」で、同じ千葉県内の信仰の山の清澄山（きよすみやま）、あるいは千葉県最高峰の愛宕山（あたごやま）も「やま」になっている。

千葉県は低い山が多いためなのか、それゆえに当初私は低いと「やま」、高いと「さん」という仮説を立てた。しかしその傾向はあるものの説得できる理屈がなく、例外も多くあって説明しきれない。

そもそも「やま」は訓読み、「さん」は音読みで、漢字の伝来と一緒にその読みである音読みが日本に入ってきたことに起因しているらしい。

漢字の音読みが日本に入る前は、日本人は比較的低い山を「やま」、急で高い山は「岳（だけ）」と呼んでいた。そして中国から漢字が伝わり、山は「さん」とも読まれ、それが音読みの始まりだ。現代でもそうだが、外来語は恰好がいいというイメージがあり当時の外来語である音読みの「さん」が普及した。そのために後から命名された山は「さん」が多いのと、「やま」が「さん」に変更されたものもあるかもしれない。これが私の仮説だ。

日本寺は奈良時代に開山しており、関東地方の繁栄は房総半島の南部から始まったという私の説の裏付けにもなっている。それゆえに奈良や房総に「〇〇やま」が多い理由は漢字の伝来前にそういう呼び名で定着していたからだろう。だから奈良では香久山、若草山、そして房総ではここ鋸山、清澄山など全て「やま」になっている。

では富士山、比叡山は何故「さん」なのかというと、実は富士山はかつて「福慈岳（ふじだけ）」と呼ばれていたと奈良時代の風土記に書かれており、富士山は後になってつけられたものだ。そして比叡山は古事記に「日枝（ひえ）の山」として記されており、大比叡と四明岳の二峰から成る双耳峰の総称だ。

ついでに書くと高野山や恐山という個別の山は存在せず、その地域全体を示す。阿蘇山もあのカルデラ火山群の総称で、個々の山は根子岳、高岳、中岳、杵島岳、烏帽子岳と全て岳だ。

つまり個々の山には日本古来の高い山の呼び名の岳がついたままになっており、後世になって総称として「さん」を用いるようになった。

後世に「さん」が多用された理由は、単に恰好いいだけでなく、あと2つ考えられる。

まずは仏教的な要因がある。そもそも仏教の寺は修行の場で、修行するために裏山がある。だから〇〇山△△寺のような呼び名になる。このことは「関東88カ所霊場巡り」で、ある寺の住職から聞いて旅行記でも紹介した。

例えば比叡山延暦寺、成田山新勝寺と呼ばれるのがそれだ。高野山という山は無いが、あの一帯が修行の場だったことを示している。

このことが信仰の山を「さん」と呼ぶという説に最も陥り易い罫なのだろう。修行と山岳信仰はちょっと違う。

そしてもう一つの理由は国土地理院だ。ここが山の名を決めている。いや表向きは各自自治体の申請で決めていることになっているが、どうも怪しい。

国土地理院では山を「さん」と読む規定があるとウィキペディアでは書かれているが、私が調べた限りではそのような資料や通達は見当たらなかった。恐らく迷ったら「さん」、あるいはとりあえず「さん」程度のもかもしれない。

群馬県の赤城山は当初「あかぎさん」で登録されたが、前橋市民の間では「あかぎやま」が定着していると地元からクレームがあつて国土地理院の地図は「あかぎやま」に変更になった。

この事例は信仰とは全く関係していないことを示している。

ただ赤城山は地元では信仰の山で、それは赤城山を見て育った群馬県出身の私が言うのだから間違いない。そして私は赤城山にある神社はたくさん知っているが、寺はひとつも知らない。

私の仮説が絶対に正しいとは言わないが、少なくとも信仰の山が「さん」と呼ばれる論拠はあまりなく、イメージ先行の話だったような気がする。

それにしてもこの問題をインターネットで調べていると、「信仰の山＝さん」がウンチクとして書かれているのが多い。きっと誰かの説がそのまま拡散したのだろう。ネット文化の危うさを感じると同時に、ロートル軍団のような「こだわり」の重要性を改めて実感する。

ふうー、ようやく宿題が終わった。